

田中哲也は無色を探る 構造家

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■都市計画

1972年生まれの田中哲也さんは田中哲也建築構造計画を開業してから8年目になる。淡々と語る姿は今も建築青年の雰囲気だ。大学入学で上京するまでは新潟市で過ごす。「高校生のときに実家を新築したことくらいかな、建築との出会いは。一般的な住宅メーカーの家でしたが…」。それも多少の影響があったのかもしれない。千葉大学では都市計画を専攻した。少しだけ「建築構造」を選ぶことも頭をよぎったというが、卒業後は都市計画のコンサルタント事務所に就職して3年。この間、ノーマン・フォスターやレゾノ・ピアノの建築を見るたびに、「今の仕事が本当にやりたいことなのか、自分もちゃんとした建築をやりたい」と模索していたという。その悩みの先に、建築構造設計が見えて来たのだった。

■江尻建築構造設計事務所

本当の建築を仕事にしたい、それは構造設計だと見極めた田中さんは、妻や周りにその想いを伝えた。そのつながりで、主に住宅メーカーの構造設計を請負う事務所に、「回り道でも構造設計の実務を勉強するため」と割り切って在籍した。おそらく超真面目な勤務ぶり才覚を見た所長から、「違うところで修行した方がいいかもしれないよ」といわれたのだったのだ。

そんなときに、大学の先輩から「すごく忙しい事務所がある」と声がかり、江尻憲泰さん（本コラム74回）の事務所へ行くことになる。学部は違っても同じ大学出身の縁がもたらしたのかもしれませんが。「事務所の引っ越しが初仕事でした」と笑う田中さんは、それから10年あまりを江尻建築構造設計事務所ですべてが、田中さんの構造家としての基礎をつくれたのだろう。

「一つの設計に必ず一つは新しいものを」と、江尻さんをとおして体得した青木先生の言葉を胸に今も設計する。教鞭にも全力をつぎ込む忙しい江尻所長のスタッフとして、さまざまな構造や規模の建築を任せてもらってきた田中さんです。

今でも「プロジェクトに手助けがほしい」と江尻さんからいわれたら、何をさて置いても飛んでいく。覇志堂が「大変だね」とニヤリとするが、それが愛弟子たる田中さんの姿だ。夕食を必ず家族と食べるという師に倣い、田中さんも徹夜明けであろうと朝食は家族一緒！を実践しているとか。師との絆は深い。

■静かなチャレンジ

田中さんは、どんな構造体も設計してきたので、建築家の意向を的確に汲むことができる。住宅を得意とする建築家から大きな信頼を受けている理由だ。「構造設計はハイブリッドがいいと思っている」。なぜなら「その方が窮屈じゃなくていい」と。木造にも長けているから、木造経験の少ない建築家も安心して相談できるのだろう。「CN釘を知らない大工がいて…」など現場での大工談議も尽きない。近作では、後天性高床住居（設計：DOG）にも生かされている。

今後の話をしましょうと覇志堂が水を向けると、若い構造志願者へのメッセージになる。「構造は敷居が高いものではないと言いたいです。一緒にチャレンジしていきましょうと伝えたい」。自身が歩んで来た道があるからこそその言葉だ。入り口を広くして設計の意を汲み、建築家とともにつくりあげていく構造家。これまで数々の名建築に携わってきたはずだ。が、自慢話はしないし、手がけた建築をそのまま静かに見つめる目をしている。

「設計にあまり色を付けたくないのです」。それが自分の構造家としての生命線だという。

